



第7章

報道の時代のなかの
島木健作『満洲紀行』

山崎 義光

(秋田大学教育文化学部)

一 はじめに

本稿は、島木健作（一九〇三—四五）が一九三九年に満州北部の移民農村を中心に旅した見聞記としての『満洲紀行』（創元社、一九四〇年四月）を対象とする。はじめに、島木の文学的営為のなかでの本書の位置づけと性格、本稿の観点を述べておきたい。

島木健作は、北海道で生まれ育ち、一九二〇年代に労働運動、農民組合などの社会運動に加わった。二八年に初めて実施された普通選挙後、治安維持法違反により収監された。転向して出獄した後、三四年に小説「癩」「盲目」を発表して作家活動に入った。三五年、現在の青森県北津軽郡板柳町出身の相澤京と結婚。三七—三八年にかけて、長篇『再建』を刊行するも発禁となり、書き下ろしで長篇小説『生活の探求』を執筆して刊行。その後、「地方」への見聞旅行をもとにエッセイや小説を精力的に書いた。三八年には、秋田、青森、北海道などを旅して「地方」で暮らす人々に取材したエッセイを発表。三九年に、満州を旅して『満洲紀行』『或る作家の手記』（創元社、一九四〇年十二月）を刊行。『満洲紀行』の最初に収録されたエッセイ「北満開拓地の課題」には、「昨年（昭和十三年の夏）東北地方の農村を旅したとき、私は、その地方の人々が、満洲開拓民の問題について強い関心を示しつつあるのを見た」と書き始められていた。また『或る作家の手記』には、三八年の「東北から北海道への旅」に続いた「満洲旅行はその時の旅の延長だった」と記した。四〇年にも東北地方などを旅し、四一年に『中央公論』で連載したのち『地方生活』（創元社、一九四一年十二月）を刊行。この中には朝鮮、満州に関するエッセイも含まれた。この間、地方から東京へやってきた人物たちを描いた『人間の復活』（中央公論社、前篇一九四〇年五月、後篇一九四一年一〇月）、東北の開拓地の人物を描いた『運命の人』（新

潮社、一九四一年九月）などの小説でも「地方」「生活」をモチーフとした。

『満洲紀行』刊行前後の社会動向や国策との関連、旅の経緯については、中川成美が詳しく論じ「島木を支えたのは満州で出会った人に対する興味と期待だけであつたと言つて良い」と評した⁴。川村湊は、国策宣伝の中では表に現れない、満州の土地問題や現に営まれている「生活」に向けた島木の眼差しを指摘した⁵。本稿でもこれらの点に着目し、報道（ルポルタージュ）の時代のなかに位置づけて考究したい。

島木の満州表象については、一九三八―四一年における一連の「地方」表象という枠組みのなかで既に論じた。島木の「地方」理解、「地方」を対象とした動機、「国策」に内属しながら批評するスタンスについて論じた。島木の「地方」への眼差しは、父祖伝来の伝統をもつた郷土であるよりも、開拓農村を一つの範型とし、地方における新たな課題と向き合い、協働的な農村経営を試みようとした人々、「新しい人間のタイプ」に向けられたことに特徴がある。『満洲紀行』もこうした意味での「地方」表象の一環として位置づけられていた。従来、三八年から四一年にかけての島木については、「転向」を否定的に評価する論脈から「国策」への順応を尺度として評価されてきた。しかし、島木の「地方」表象は国策否定ではない代わりに、単なる追従でもなく、見聞にもとづいた問題提起的な性質をもっていたことに留意する必要がある。本稿でもこうした観点から、現地報道的な性格を担った『満洲紀行』を対象を絞って論じる。

本書は、「序」のほか一四のエッセイと一つの小説、三〇葉の写真から成る。以下では「序」に述べられた二つの点をとば口として論じたい。

一つは、『満洲紀行』に渡邊勉の写真が挿入されていたことへの着目である。一九三〇年代における報道写真の隆盛との関わりから、本書を同時代的背景の中に位置づけて考究する。国際的・多言語的な環境や、遠く離れた場所との距離を超え、多くの大衆に伝達しうる表象手段として、特定のテーマを組み写真で表象した報道写真が、各種雑誌の目玉記事の様式として定着していた。『満洲紀行』は、満州に関心をもつ日本人々に向けて書かれ、本書に挿入された写真は国策宣伝誌にも掲載されていたものが含まれていた。

もう一つは、『満洲紀行』の企図と、それに関わって隠顕されるアンドレ・ジッド『ソヴィエト旅行記』への言及である。この言及との関連から、「新しい人間のタイプ」の探求を焦点とした『満洲紀行』の批評的性質を明らかにしたい。

二つの観点は、いずれも報道（ルポルタージュ）という点で共通する。この観点から考究することを通じて、見聞に準拠した批評性をもつ報道として『満洲紀行』の性質を明らかにしたい。

二 国策宣伝の枠組みと報道写真

まず、『満洲紀行』に挿入された写真と本書の関係に着目したい。

満州への計画的な移民は、一九三一年の満州事変、三二年三月の満州国建国後、同年満州協和会が発足、日本から武装移民団が入植を始め、三五年に日本で満州移民協会、満州国で満州拓植株式会社（のち満州拓植公社）が設立された。三六年に広田弘毅内閣において満州移民が国策となった。三八年には対ソ戦略と満州の治安維持を目論んだ満蒙青少年義勇軍が渡満を開始した。ソ連との国境問題をめぐっ

ては三九年五月九月にノモンハン事件が起こっていた。同年九月には、ドイツがポーランド侵攻、ヨーロッパで第二次世界大戦が始まった。四〇年九月、日独伊三国同盟が締結される。

こうした社会的動向のなかで、島木は一九三九年三月二二日に東京を出発し、かつて農民組合にいた香川県に立ち寄ったのち、朝鮮半島を経由して渡満⁹、四―六月に、満州北部の移民農村を訪れた。北東部の弥栄村^{いよさか}、千振郷^{ちぶり}から、龍爪^{りゆうづめ}、四家房^{しかぼう}の大日向村分村、黒河^{くろがわ}、海拉爾^{ハイルン}などに及ぶ。ハルピン、勃利^{ぼつり}、孫呉^{そんご}、鉄驪^{てつり}、嫩江^{ぬんじやう}の義勇軍訓練所の他に、開拓農村を「十五ヶ所ほど」訪れた¹⁰。

島木の著作の中で、多数の写真を挿入したものは『満洲紀行』のみである。翌年には、おもに日本の地方に取材した『地方生活』を刊行したが、写真はない。『満洲紀行』に写真が挿入されたのは、満洲国建国後の国策としての移民が、国内外に向けた宣伝の対象となっていたことが背景にあった¹¹。

『フォトタイムス』一九四〇年二月号には、円城寺進（國務院弘報処写真室）「満洲国写真政策とその方向に就て」、大北良之輔（協和会中央本部映画班）「協和会運動に於ける写真宣伝」が掲載され、満洲の「宣伝」と写真の関係について論説していた。満洲国政府の行政組織である國務院内弘報処の立場から、円城寺は次のように述べた。満洲国建国の理想は「日満一体不可分関係に立ち、民族協和を實踐し道義世界の實現を期せんとする」ことにあり、そのためには「之を国民に徹底せしめねばならぬ」とともに「建国精神と相容れない思想は、断乎として之を殲滅しなければならぬ」。そのために弘報処が設置されたという。写真室の業務は「写真によつて建国精神の徹底を期し躍進満洲を正確に認識高揚せしめる」ことにある。その主旨に沿つて「中外に知らしむべき宣伝方針を企画し、宣伝主題を作成しそれに基いて、平均二名乃至三名宛全滿各地に出張し主題目的をカメラに依つて撮影し」た写真を「対内外新聞雑誌社

其の他刊行物に配給してゐる」という。また、協和会の立場から、大北は同様の「建国精神」にもとづいた「宣伝工作手段」として、「写真は先づ大衆に歓迎され、親しまれ、而もリアルであり、アトラクティブであり、印象的であり宣伝の目的に最も合致せる性格を有する」がゆえに、有用な「宣伝手段」だと述べた。こうして満州国の宣伝工作（プロパガンダ）と写真との関わりが深まるなかで、多くの写真家が満州で活動し、そのことが島木と渡邊の接点となつて『満洲紀行』に写真が多数挿入されることになつた¹²。

写真の社会性については、一九三二年に板垣鷹穂が「グラフの社会性」¹³で、言語の壁を越えうる、カメラの眼によるイメージをモニター・ジュして現代社会を表象することの流行と可能性を論じていた。三二年に、伊奈信男により「ルポルターージュ・フォト」(reportage photo) が「報道写真」と訳された。三四年三月、日本で最初の「報道写真展覧会」が日本工房主催で開かれた。アメリカで『LIFE』が創刊されたのは三六年だつた。四〇年には、国策宣伝の中での「報道写真」の意義について、ドイツにおける戦時下国家統制と民間の写真家との関係をふまえ、「新体制」下における「国家宣伝」の中での役割が論じられるようになっていた¹⁴。島木が作家として活動を始めてから『満洲紀行』刊行前後まで、日中戦争が本格化していった時期は、写真が報道（ルポルターージュ）という社会性を担った様式を得て普及し、戦時下におけるプロパガンダへの活用が積極的に行われ始めていた時期に重なる。

渡邊勉は、島木と同時期、一九三九年三―二月の約九ヶ月間、取材や活動を行った。満州北部の農村や諸機関を訪れたとともに、日本から持ち込んだ前衛写真の展覧会開催、満州で活動する写真家達との交流、国務院弘報処主催の防共展覧会制作委員会の仕事などを行った¹⁵。渡邊はその後「報道写真」

の様式としての「組み写真」をアマチュア向けの著書『組み写真の写し方纏め方』（アルス、一九四一年九月）で論じた。報道写真とは、社会的事象や自然的事象を主題とする意図と目的の下に作られ、「ある現象を写真に取上げて、社会に報道すると同時に指導する」ものであるとした¹⁶。

島木の旅行も、満州移民が国策となり社会的関心が高まるなかで、一九三八年十一月、近衛内閣の有馬頼寧農林大臣の要請によって発足した農民文学懇話会からの派遣だった¹⁷。その際、島木は自らの「文学者」としての立場を、「国策」に対する「批判の眼」にあると述べた¹⁸。そこに『満洲紀行』の「序」でいう「一つの精神」があった。

『満洲紀行』に収録されなかつた島木のエッセイに『アサヒグラフ』一九三九年九月一三日号掲載の「開拓地の子ら」がある【図1】。堀野正雄の写真に付されていた¹⁹。撮影場所と対象について「写真は開拓地、千振郷の家庭風景」とあるが、「託児所」だったと思われる²⁰。幼い子供を抱えた女性と、三人の幼児と羊、背景にも羊らしき群が見える。聖母像になぞらえたような構図である。記事は満州農村における子育てに関するもので、日本や満州の都市部よりもよく育つ旨の聞き書きが記された。「未開の奥地としておそれられてゐるところの方が、都会地よりもはるかに子供の育ちがいゝ。このことは、開拓地の生活が全体的に健康で澁刺としてゐることの実証でなくてなんであらう」と述べ

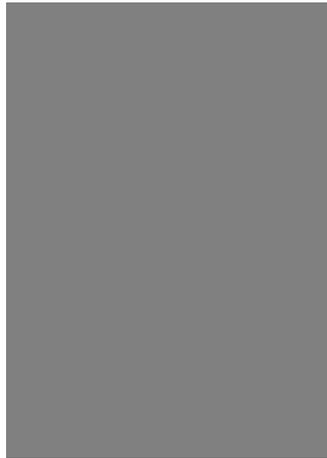


図1 『アサヒグラフ』
1939年9月13日号
島木健作「開拓地の子ら」
カメラ 堀野正雄

た。島木の満州への旅は、宣伝工作が進められる中で行われたものである。「開拓地の子ら」は、そうした主旨に合致した写真記事であろう。ただし、『満洲紀行』には収録されなかった。

三 渡邊勉の写真

島木は「序」で写真について次のように述べていた²¹。

この本にをさめた写真はすべて、友人渡邊勉君の作品である。渡邊君は、私とほぼ同時頃に渡満し、まる九ヶ月かの地に止つて、満洲の生活を殆どあらゆる角度から写真にとつて歸つた。その作品数は六千枚に及んでゐる。同君のこの仕事は写真雑誌に次々に発表されてゐる。この本のためにも、私の願を入れてこれらの二十数葉を提供してくれた。私の文章と渡邊君の写真とは必ずしもマッチしてはゐない。しかし、印象的な紀行文からははるかに遠い私の旅行記が、これらの写真によつて柔らげられ、補はれるところがあれば有難いと思つてゐる。渡邊君に深く感謝する。

ここでは「二十数葉」と記されているが、挿入された写真は三〇葉である。左に、挿入された場所を題名と写真のキャプションで示し、掲載順に、本書「写真目次」に対応する番号を付した。このうち、渡邊が『満洲紀行』所載のものと同じもしくは同じ場所を撮つたかと思われる写真を用いた記事を、確認できたものについて注記した。

「北満開拓地の課題」(『文藝春秋』一九三九年九月) ※一葉

1 協和会全国連合協議会々場【図2】 渡邊勉「満洲を七枚の写真で語る」(『婦人画報』一九四〇年二月) 中の一葉。また、渡邊勉(カメラと構成)「遅しき建設」(『商店界』一九四〇年六月) 中にもある。どちらも、『満洲紀行』所載写真とは左右が逆になっている。

2 開拓地の子供たち(一)

3 開拓地の子供たち(二)

4 小学校

5 復習【図3】 「母も子どもともに働らく」(渡邊勉『組み写真の写し方纏め方』アルス、一九四一年九月)。

6 除草(一)【図4】 「開拓地」(渡邊前掲書)の右上【図5】。

7 除草(二)

8 開墾 渡邊勉「鏡泊学園を語る」(『新満洲』一九四〇年三月) 中の写真と同じ場所か。

9 収穫後の畝(満農) 前掲「遅しき建設」中の一葉と同じ場所か。

10 野菜畑

11 漬物

「新たなる出発」(『文藝春秋』一九三九年一〇月) ※六葉

12 満洲馬

13 中耕【図6】 「夏天来到了(なつはきたれり)」(『新満洲』一九四〇年六月号)の中央下。「開拓地」



図4 6 除草



図2 1 協和会全国連合協議会々場



図3 5 復習



図5 「開拓地」渡邊勉
『組み写真の写し方纏め方』(アルス、1941年)
右上が図4と、右下が図6と同じ

(渡邊前掲書)【図5】。

14 慰安展覧会ポスター

15 節句の日

16 移植 「萌え出づる大地 忙しい開拓地の春」(『新満洲』

一九四〇年五月) 中の一葉。

17 草取り

「満洲旅日記抄」(『文学界』一九三九年一〇月) ※四葉

18 水汲み 「母も子もともに働らく」(渡邊前掲書)。

19 炊事 同右。

20 若い妻 同右。

21 懐郷

「勃利にて」(『文学界』一九四〇年四月) ※五葉

22 団の医者【図7】 「開拓地の生活」(『フォトタイムス』

一九四〇年一月)。「母も子もともに働らく」(渡邊前掲書)。

前掲「萌え出づる大地」の次ページにある「榮え行く開拓地」

(『新満洲』一九四〇年五月)【図8】の右上にもある。この記

事の「撮影」者として堀野正雄と渡邊勉の名が併記されている。

左上に堀野撮影の「託児所」の写真がある²²。



図7 22 団の医者



図6 13 中耕

23 開墾地へ

24 剪草機モトア

25 緬羊

26 乳牛

「興農鎮の一夜」

「孫呉にて」(『新満洲』一九三九年九月)

「車中瞥見」

「齊々哈爾から訥河まで」(『北窗』満鉄哈爾濱図書館、

一九三九年十一月)

「満洲の日本人の生活」 ※二葉

27 ハルピン・キタイスカヤ街

28 白系露人の子供たち【図9】 渡邊勉(撮影・文)「トルコ・タタアル民族文化研究所に中岡良一氏

を訪ねて」(『カメラアート』一九四〇年十一月)中に同じ時に撮られたとみられる写真がある。

右側の人物は原敬暗殺犯だった中岡良一。

「満洲の農家」(『随想集 草炎』東京農業大学斯友会新聞部、一九三九年十二月) ※二葉

29 粗朶集め 「収穫の凱歌」(『新満洲』一九四〇年九月)の下段中央。

30 大豆の収穫

「満洲へ旅する人に」



図8 1940年5月号『新満洲』
堀野正雄、渡邊勉撮影
「栄え行く開拓地 大陸に育つ開拓第二世」
右上の写真が図7と同じ

「ある読書」

「感想」

「旅の手帳から」

「青服の人」(『新潮』一九四〇年一月)

これらの写真は満州移民の宣伝という枠組みに収まるものだった。とともに島木の文章と適合した傾向がある。まず、日本からの開拓農村の生活について、特定の場所に限定せずに述べた最初の三篇に二一葉の写真が、撮影地と本文が一致しているかは定かでないまま、島木が言及した満州農村の暮らしのイメージとして付されている。どこか、誰かがあいまいなものが多い。顔が正面を向いて大写しにされたものはほとんどない。子供の日常や農作業など、異国のエキゾチズムや伝統、隔絶した場所を強調してイメージさせるよりも、日本での暮らしとの近さを感じさせる生活の状況を前景としている。一方、日本からの移民以外の住民の様子をうかがわせる写真は少なく27〜30しかない。

別の見方をすると、本書に採られた写真には、最初の「1協和会全国連合協議会々場」【図2】の写真を除き、報道写真でしばしば取り上げられた、国家的・組織的な式典やイベントなど、国策との関係を意識させる場面の写真がなく、農作業や生活の風景を主とする。

「孫呉にて」は、満蒙青少年義勇軍訓練所を訪れた際の文章だが、写真は付されていない。しかし、こ



図9 28 白系露人の子供たち

の文章の初出誌『新満洲』（一九三九年九月）には、報道写真記事「孫呉 義勇隊訓練所」（撮影者は不明）が掲載されていた【図10】。そこでは組織的なイベントの写真と文章が組み合わされていた。当時の雑誌で好んで掲載されていたのは、宣伝が主旨で、訓練所や各地開拓団などにおける組織活動の風景、儀式やイベントの場面の写真が多かった。この記事には、次のような文章が付されていた（中央上部の文章）。

内地の皆さま御元気ですか 遙か北満からお伺ひ
申し上げます 我が孫呉義勇隊に於ては昨年秩父宮
殿下御来臨遊された当日を当訓練所の開拓記念日と

し 去る五月二十八日その第一回記念式を殉職した訓練生の慰霊祭を兼ねて盛大に開催致しました 丁度当日は日満官民並に日満小学児童多数の参観があり 我等義勇軍の意気益々軒昂たるものがありました 写真班の撮した当日の模様を新満洲を通じてお伝へ致します

孫呉の青少年義勇軍訓練所で「秩父宮殿下御来臨遊（来遊）された当日を当訓練所の開拓記念日」とし、「殉職した訓練生の慰霊祭を兼ね」て開催されたイベントの様子が、数葉の写真で構成された報道写真記事



図 10 1939年9月
『新満洲』「孫呉 義勇隊訓練所」
（署名なし）
左側中段に「孫呉憲兵隊検閲済」とある

である。こうした写真が『満洲紀行』に採られていないのは、島木のエッセイには、そうした国策高揚的な組織活動への関心がほとんど記されていないことと対応している。

島木が「孫呉にて」に記したのは、訓練所を案内してくれた元小学校教師「T氏」の話と訪問時の一コマである。勃利の訓練所を訪ねたと言うと、T氏はそこに息子がいたと言ひ、満州へ来た経緯を語った。息子が義勇軍に行きたいと言ひ出したこと、自らも教師として訓練所に入ることを勧める立場にあったことを語り、しかし「決意するまでにはなほさまざまな心理的な動きを重ね」ながら、息子を送り出し、自らも腹を決めてやってきたという。「T氏からは、鋭さも力も感ずることはできなかった。また遠大な抱負も、新しい方針も聞くことができなかつた。しかし訓練所の仕事には、幹部の一人としてT氏のやうな人はもつとも必要なそして大切な人であらうと思つた」²³と記した。先の報道写真と比べたとき、このエッセイの焦点は、冒頭に記しているように「新しい国満洲国がどのやうな人間をつくり出しつつあるか、日本の私達の周囲にないどのやうなタイプの人間がそだちつつあるか」²⁴ということにあった。しかし、T氏のようなタイプの人は稀である。訓練所への「さまざま視察者」は「最大級の讃辞をあびせる」が、「しかしはたして自分の子供をここに託すといふ気になるだらうか」²⁵とし、次のように述べた²⁶。

訓練所のことではないがかういふこともある。満洲国の人々の私達への言葉は、力強く美しく立派である。しかしその人々のなかに、自分の子供はここで育てる気にはならぬ、少くとも学校だけはここですませる気になれぬ、とさういふことを口に出していふ人もあるし、口にいはず

までも実際さうしてゐる人が多いのだ。私はその人々の気持はわかるし納得する。私だつて同じ状態にあればさうだらうとも思ふ。しかしさう聞くその瞬間に、さきの力強く美しく立派な言葉が、たちまちにして色あせてしまふのは、これはまたいかんともしがたいことなのである。

「満洲国」を理想化した「力強く美しく立派な言葉」と、「自分」のこととしての「実際」との懸隔を、どう生きているかということに島木の関心の中心があつた。

『満洲紀行』所載の写真は、国家に従属する組織であることを前景化した写真ではなく、満州で暮らす人々の日常生活の断面が写されたものだった。先に引用した「序」の一節で、島木は「私の文章と渡邊君の写真とは必ずしもマッチしてはゐない」と述べていた。まずは本文と撮影地は一致していないという意味であろう。とともに、島木が焦点を当てて書いたことは、写真には写らない諸課題と、それに向きあう人の苦衷にあつたことをも意味していただろう。「渡邊君の写真」は、日本と大きく隔てのない日常の風景を写しており、それによって島木の「文章」が「柔らげられ」ている。また、国策を背景とした満州移民の現地での様子を宣伝する目的に限定されながら撮られたもので、その意味でも「柔らげられ、補はれ」ていたといえるだろう。

四 『満洲紀行』の企図

『満洲紀行』は、どのような企図によって出版された書物だったか。「序」の冒頭には次のように記されていた²⁷。

満洲紀行の結果生まれた私の文章は、新しい土地のさまざまな印象をこまかに綴ること、人々を楽しませる旅行記であることは出来なかつた。また、ジイドはそのソヴェト旅行記において、自分の考察の領域は、心理的な問題に限られてゐる、と言つてゐるが、そしてそれは文学者にとつての節度であるとも思はれるが、私はさういふ節度を守りことも出来なかつた。私のものを見る角度は単に心理的であることは出来なかつた。主として私の考察の対象となつた北満の開拓地の問題自身が、私をそこにとどめることをしなかつたのである。私は、北満における日本農民の開拓地を通して、新しい国の動きに触れようとしたのであつた。

私の見聞は狭く、貧しい。そしてこれらの文章はそのなかから得たもののさらに一部分でしかない。現実はどうほどの部分も伝えられてはゐないだらう。ただ私はこれらの文章を一貫して一つの精神があると思つてゐる。それは私を満洲に呼んだところのものでもある。対象とした世界に於て何が問題であるか、それらの問題をどう見、どう考へてゆかねばならぬかについて、私は述べてゐる。私は一つの態度を持してをり、私には自分の意見がある。そして私は日本の文学者によつて書かれた多くの旅行記に欠けた性格をその点に見出すものなのである。

島木は自らの「文章」の性格を、「人々を楽しませる旅行記」ではなく、「新しい土地のさまざまな印象をこまかに綴ること」にあるとした。加えて、ジッド『ソヴェト旅行記』を引きあいに、「心理的」な見方にとどまらず、「北満における日本農民の開拓地を通して、新しい国の動きに触れようとした」と述べた。そこには「一貫して一つの精神がある」とし、「狭く、貧しい」「見聞」であると限界を認め

ながらも、「対象とした世界に於て何が問題であるか、それらの問題をどう見、どう考へてゆかねばならぬかについて、私は述べてゐる」と、本書の企図を述べた。個人的な印象にとどまることなく、「一つの態度を持して」、「問題」発見的に「自分の意見」を述べることに、自らの「見聞」記の性格をおいた。

『満洲紀行』の前半には、開拓農村の見聞記がならぶ。「北満開拓地の課題」「新たななる出発」は、開拓地農業の経営に関する課題について、個人経営では雇農が必要となること、自立のためには共同経営を行うのが合理的であること、満人の農法に見倣うべきこと、北海道農法の可否などについての見解を見聞にもとづいて具体的に論じた。「満洲旅日記抄」「勃利にて」「興農鎮の一夜」「孫呉にて」「車中瞥見」「齊々チチハルハ爾ハルから訥河トツガまで」「満洲の日本人の生活」「満洲の農家」は、訪れた先での見聞、出会った人々のことを、旅先での描写を交えて記した。「満洲へ旅する人に」は、満州を旅行するうえでのアドバイスとともに、自らの旅行では何に注目したかを述べた。「ある読書」は、満州に関心のある学生へ向け、満州関連本と実際とは大きな違いがあることを述べた。「感想」では、島木の満州に関するエッセイに対して批難を含んだ反響があったことに対して、自分が書いたのは見聞に基づき国策的事業の課題を提示した「批評」であると述べた。「旅の手帳から」には、旅の見聞の拾遺的なエピソードを断片的に併記した。そして、最後に配されたのが小説「青服の人」である。

こうして記した満州事情を誰に伝えようとしたのだったか。「感想」では、島木が雑誌に発表した文章が開拓事業の当局者から批難されたことを受けて、「私の書いた文章は、その人々（引用者注 開拓事業の当局者の人々）の仕事に対する無批判的な礼讃文ではない。そこには幾らかの批評といふものがある」²⁸とし、次のように述べていた²⁹。

私達は新しい土地に旅行をし、さまざまな人間の生活を見、感想を持つて帰つて来る。私達は
その得たものを、一体、誰に向つて告げようとするであらうか？ 私達はそれを、いふまでもなく、
広く国民に向つて告げようとするのである。官吏ならば何を措いても先づ上司に向つて復命報告
をするだらう。私達はしかしそんなものではない。私達は国民の一人として、国民に伝へ国民がそ
の問題について考へる何等かの助けとなることを欲するのである。それが文筆の徒の任務である。
また私達の「協力」の方法でもあるのである。「ほかに言ふな。我々に言へ。」といふ人々は、この
事をどう思つてゐるのであらうか。国民の事をどう思つてゐるのであらうか。

国策的事業といふものは、それを担当してゐる、一部の国家機関だけの問題ではない。広く国民
全体の問題である。だから国策なのである。「我々にだけ言へ。」といふのは、国民の参加を拒む思
想である。我々だけあればいい、ほかのものはいらぬ、といふ思想である。これほどはつきりした
独善といふものはない。

満洲開拓移民という「国策的事業」は、「国家機関だけの問題」ではなく、「広く国民全体の問題」で
あるとの認識に立ち、「国民に伝へ国民がその問題について考へる何等かの助けとなること」に、自ら
の見聞を伝えるべき宛先と意義があると述べた。「無批判的な礼讃文」ではなく、「協力」のための「批
評」こそが「文筆の徒の任務」だという。すなわち、文学者の立場で、開拓地としての満洲に関心をもち
つ「国民」へ向け、「国策」宣伝では語られることのない現地を抱える「問題」を、見聞に準拠して報
告しようとしたのだと言える。ここでいう「批評」の意義については、次のように述べていた³⁰。

批評はつねに多少とも苦言である。苦言のなかにこそ誠意がひそむのである。協力とは人の苦言を受け入れる精神の上でのみ成り立つのである。ほとんど阿諛に近い礼讃のみが喜ばれてゐる現状である。世のつねではあるとしても、新しい国の新しい事業がそれでは仕方あるまい。

ここには「新しい国の新しい事業」に対する二重の立場が述べられている。すなわち、「新しい国の新しい事業」に「協力」する立場に立ちつつ、しかし「阿諛」「礼讃」ではなく、「誠意」ある「苦言」として「批評」する立場という二重性である。

五 ジッド『ソヴィエト旅行記』への言及と「青服の人」

『満洲紀行』所載のエッセイには、満州の農村で「生活」する人々の抱えた様々な課題が描き込まれていた。国策に対する真つ向からの反対ではないながら、追従ではなく、国策のもたらす現状について「見聞」にもとづいた自分の意見を持して「批評」的に文筆でかかわること。それを、満州に関心を抱く「国民」に伝えること。そこに島木の企図があり、自らの立ち位置と意義を定位していた。

こうしたスタンスには、この頃邦訳で広く読まれたアンドレ・ジイド『ソヴェト旅行記』『ソヴェト紀行修正』からの影響がうかがえる。『満洲紀行』では、それにどう言及していたかを確認しながら、島木が描いた、満州に生まれつつある「新しい人間のタイプ」の形象の一つとして小説「青服の人」を位置づけてみたい。

『ソヴィエト旅行記』は、スターリン体制下の一九三六年に、初めての共産主義国家として躍進し国

際的な期待とともに関心を集めていたソヴェエト社会主義共和国連邦を、ジイドが数名の共産主義（シンパ）の作家たちと訪れた旅行記である。当時のソ連を見聞した現地の報告、報道としての意味を担った旅行記だったといえよう。入国そのものが共産党、ソ連への共鳴者であることにもとづいており、おのずとソ連への讚美が期待されていた。しかし、書かれたのは理想とはほど遠いソ連社会の姿だったことが大きな反響を呼んだ。

一九三六年一月にフランスで刊行され（「ソヴェエトより還る」原題 *Retour de L'U. R. S. S.*）、邦訳もいち早く一九三七年一月号『中央公論』に第一章から第三章の前半までが発表されて、間もなく全訳が刊行された（アンドレ・ジイド『ソヴェエト旅行記』小松清訳、第一書房、一九三七年三月）。その後岩波文庫（一九三七年九月）で出版されるも、発売直後に発禁となり、同年九月六日付けで一部削除した改訂版が刊行された³¹。

ソ連社会の画一主義やスターリンの神格化などに批判的に言及した本書に対する反響は大きく、ソ連共産党の機関誌『プラウダ』の批判をはじめ、ロマン・ロランなど共産主義、ソ連シンパの立場からはジッドが共産主義者から転向して批判したと受けとめられた。ジッド擁護の論説も含めて、ヨーロッパにおける反響は日本においても報じられた³²。『中央公論』掲載直後には、中條（宮本）百合子「ジイドとプラウダの批評―文芸時評―」（『文藝春秋』一九三七年二月）が出された。中條はジッドの経歴を踏まえながら、作家としての「純粋な誠実」を認めつつ、それゆえにソ連の現実を見誤ったとした。

ジッドは「序言」で、「私にとつては、私自身よりも、ソヴェエトよりもずっと重大なものがある。それは人類であり、その運命であり、その文化である」³³と述べていた。国分俊宏は、ジッドの立場は不

偏不党の無邪気なまでの「知的誠実さ」³⁴にあったという。共産主義社会を理想と観ることと、実際に見聞したソ連との乖離を「誠実」に記したところに『ソヴィエト旅行記』の特徴がある。しかし、共産主義、ファシズム、自由主義といった社会理念が対立していた一九三〇年代において、ソ連・共産主義批判は対立陣営に政治的に利用されることが懸念され、それゆえに批判されたという事情があった。

『満洲紀行』の「序」では、ジツドが「心理的な問題」に限定したと述べたことに対して、自分は「新しい国の動きに触れようとした」と述べていた。ジツドのいう「心理的」とは、どう理解したらよいか。同時代に小林秀雄³⁵は、ジツドのいう「心理的見地」とは「自分の観察の角度」のことであり、「作家たる自分は自分流にものを見る、他人流には見る事が出来ない、それを心理的見地（この言葉はわが国では誤解され易いが）と呼んだに過ぎぬ」と断じていた。国分俊宏³⁶は、ジツドが「私を共産主義へ導いたのはマルクスではなく福音書なのだ」と述べていたことをふまえ、「心理的」とは人類に対する素朴な理想であり「現実の政治に関わるといふよりは、精神の次元に限られたもの」だったと解している。これらに通じるのは、共産主義、ファシズム、自由主義などの政治的な立場とは別の次元にジツドの見地があったとする理解である。

「心理的」な問題の見方とは、政治的イデオロギーとは別の次元で、社会に期待するあるべき理想を基準とした固有の見方であったとすれば、島木は、特定の政治的な立場に準拠するのでもなく、また旅の個人的印象にとどまることなく、満洲開拓地の見聞にもとづいて、国策的理想からかけ離れた実際の「問題」を発見し「新しい国の動き」に対して「苦言」（批評）を述べようとしたと解せる。島木が注視し記した見聞は、開拓団の経営にかかわる諸問題であり、民族の混淆（「五族協和」）と力関係で多く

の軌轢が生じているなかにあつて、「新しい国」での「生活」の形を生み出そうとしている人々の姿だった。

島木は、それまでの政治信条であったマルクス主義にも、国策にも、短絡的には依拠せずに、満州開拓に関心をもつ人々に向けて、自らの「見聞」に基づいて見出した「問題」を記そうとした。そのとき、『ソヴィエト旅行記』がもつていたスタンス、理想は肯定しつつも見聞にもとづいて現実を批判するスタンスを、モデルとしていた形跡がある。

「旅の手帳から」の最後に配された断章では、次のように「ソヴェト紀行」に言及した³⁷。

「孤独と沈黙に対する何と深い欲求が、僕のうちに巣食うてゐることだ。」と、ウージエヌ・ダビが死の数日前にその手帳に書きつけたとジイドがソヴェト紀行のなかに書いてゐる。ダビとはちがふ心からではあつても、私もまたそれを書きつける。長い旅をつづけ、たくさんの人々に逢つてゐるうちに、さういふ欲求は段々強くなつて行く。精神と肉体の疲れからばかりではない。しかし言ふべきことは言はねばならぬだらう。

ここで言及されているウジェーヌ・ダビ（一八九八—一九三六）は、ジッドとともにソ連を訪問したフランスの作家である。この旅行で猩紅熱に感染しセバストポリで客死した。『ソヴェト旅行記』には、次のようなダビへの献辞が付されていた。「亡きウージエヌ・ダビに／彼の傍で、そして彼とともに体験し／思索したことどもの反映であるこの書を捧ぐ。」（／は改行）。ダビ「とともに体験し」「思索したことどもの反映」とは、沈黙したダビの意味もジッドが背負つて書いたことを意味する。島木が言及し

た「孤独と沈黙に対する何と深い欲求」というダビの言葉は、『ソヴェト旅行記』ではなく、『ソヴェト紀行修正』（堀口大学訳、第一書房、一九三七年一〇月）「附録」中の「同行者 二」に付された註にある³⁸。ダビが旅の途中から「僕等ほどの熱をもたなくな」り、「もの思ひに耽つたり、読書したり、ものを書いたり、女相手に慇懃遊戯をしたりしてゐることが多くなつた」という本文に「註一」が次のように付されていた。「彼はその死の数日前、「孤独と沈黙に対する何と深い欲求が僕のうちに巢食うてゐる事だ！」と、かうその手帳に書きつけてゐる」。この注釈は、自らはソ連の見聞にもとづいた発言をしなかつたダビの立場や考えと、ジツドのソ連批判との関係に触れた文脈のなかにある。ソ連への批判的な言及がもつ政治的な難しさ、ソ連が理想の国であつてほしい願望と見聞した事実との落差の間で、ダビが「孤独」に「沈黙」していたのだということが読み取れる。ジツドの書はこうしたダビの意思をも引き受けているということが含意されていた。

島木がこのエピソードに触れたのは、満州で見聞した人々の抱える課題を国策への「苦言」（「批評」）として述べたことを、沈黙するダビの意思をもふまえて発言したジツドに、自らをなぞらえていたからであろう。それは「長い旅をつづけ」るなかで、満州における諸課題に黙々と取り組んでいる人々に共感しつつ、それを見聞した自分は「言ふべきことは言はねばならないだらう」と述べたことに相当する。そして、この文章の直後に小説「青服の人」が配されていた。

島木がもつとも印象深く『満洲紀行』に記したのは、五族協和という国策の理念に収まらない矛盾や困難に遭遇しながら、それでも課題に向きあつて尽力する「新しい人間のタイプ」³⁹の人だった。「北満開拓地の課題」では、満州と蒙古とのあいだで土地紛争の解決に尽力する人物に触れて次のように述べ

ていた⁴⁰。

満人部落に深く入りこみ、汗と垢とにまみれ、蠅と蚤と南京虫とにおそはれながら、長年月にわたる民族間の土地紛争の解決のために力を尽してゐるやうな日本の青年に接したときには、感動の涙がにじんだ。名においても、物質においてもむくいられることなく、そのやうな生活がすでに十年にも近いといふことは！ 死をかけて一瞬に事を決するといふ勇氣にまさる大きな勇氣を必要とするこのやうな行為が、いかに物静かに、つつましい謙讓さでつづけられてゐることであらう。

「死をかけて一瞬に事を決するといふ勇氣」よりも、「紛争」に直面しつつ「力を尽し」、「物静かに、つつましい謙讓さ」で行動する人物は、「新しい人間のタイプ」の一つとして小説「青服の人」の主人公に形象化されている。

この小説は、満州に住む青年「苗場信助」を主人公とする。苗場は、友人から「満人服」（青服）を着ることで汽車に乗ったときや日本と満州を往復する際に起こる「不便」を聞かされた。しかし、苗場はあえて「満人服」を着ることで差別的待遇を受け、それに反抗したのだった。五族協和という理念の正しさを、差別に反抗することで啓蒙しようとした。

だが、そうした振る舞いは「安価なヒロイズム」⁴¹だったと気づく。苗場は、村の中核的な人物として日本人と満州人とのあいだを仲介する役割を果たしていた。あるとき、村が「匪賊」に襲撃され、苗場の股肱として信賴していた陳志平が殺されてしまう。陳は、死ぬ間際に、襲撃してきた者のなかに村の

者がいたことを言い残す。苗場は、表向きの様子からだけではうかがい知ることのできない、日本人と満州人との深い溝を思い知らされた。そして、蒙古と満州の間の土地所有権をめぐる紛争を仲介し解決に奔走する経験を通じて苗場は変わる。その姿は次のように描写された⁴²。

すべて実質的な仕事をしてゐる人とはさういふものであらうか、彼も亦口では主義のやうなものは殆ど語らなかつた。どこか悲しげなまでに沈鬱に見える、非常に謙遜な人であつた。この人はお茶をのむ時にも一寸押しただくやうにしてからのむのであつたが、さういふしぐさが少しもわざとらしくなく自然なのであつた。強ひて色分けすれば右翼の人なのであらうが、私達が東京あたりで見るやうなその派の人とはちがふ。私はおなじやうな仕事に従つてゐる、もとは左翼だつた人にも逢つたが、今は共に同じこの国の理想に生きながら、それぞれにその過去に従つて、人間の持味がちがふところを興味深く思つたのである。

「主義のやうなものは殆ど語らな」い。「どこか悲しげなまでに沈鬱に見える、非常に謙遜な人」として苗場は描かれた。五族協和の建前とかけはなれた満州における民族間紛争の現実。しかし、そうした現実を、「主義」のような理論で糊塗することなく、「沈鬱」に受けとめつつ「謙遜」に振る舞う人物として描かれた。こうした人物の形象は、期待と希望をもつがゆえに現実との落差のあいだで「孤独と沈黙」を欲求したダビに一派通じつつ、「実質的な仕事をしてゐる人」として形象化されたものだったといえよう。

六 おわりに プロパガンダとリアリズムの臨界

島木は、一九三八年に農民文学懇話会設立に先立つ有馬農相との懇談会の後、「国策」と「文学」との関係について、「私は単に国策に順応するだけの文学なぞが、いやしくも文学である以上、あらうとは思はない。作家には作家の眼があり、それは批判の眼である」⁴³と述べていた。こうした姿勢は『満洲紀行』や『或る作家の手記』に一貫したものであった。

ここまで『満洲紀行』には「国策」の枠組みと「批判の眼」という二重の性格があることを、満州をめぐる報道写真と、現地報告的な性格をもった旅行記としての『ソヴェエト旅行記』への言及とを観点に検討してきた。写真の挿入は「国策」プロパガンダと接し、『ソヴェエト旅行記』の参照は「問題」を直視するリアリズムと接するところに現れていた。満州への見聞旅行は、それ以前の「地方」への見聞旅行の延長であり、満州移民が抱える問題のなかで「新しい人間のタイプ」を探访することに動機づけられていた。小説「青服の人」はその形象化だったといえよう。

国策の枠組みの中で移民し、満州の農村で生活を営む人々が現実には直面している「問題」に、島木の「文学」者としての「作家の眼」が向けられていた。『満洲紀行』は、見聞に準拠した批評的な視角から、厳しく統制され要請された「国策」プロパガンダから漏れる「問題」を見出すリアリズムで記されたルポルタージュだったと評価できるだろう。

〔付記〕引用は『満洲紀行』（創元社、一九四〇年四月）を用い、これ以外の島木健作のテキストは『島木健作全集』全一五巻（国書刊行会）を用いて『全集』と略記した。また、図版のうち『新満洲』からの引用は復刻版（不二出版）を用いた。

- 1 以下略歴は「年譜（自撰）」、高橋春雄編「年譜」（『全集』一五巻、四八七―五二二頁）による。
- 2 『満洲紀行』、三頁。
- 3 『全集』九巻、一四頁
- 4 中川成美「幻影の大地 島木健作『満洲紀行』論」小田切進編『昭和文学論考』八木書店、一九九〇年。
- 5 川村湊『異郷の昭和文学』岩波書店、一九九〇年、五二―六〇頁。
- 6 拙論「島木健作の「地方」表象」高橋秀太郎・森岡卓司編『一九四〇年代の〈東北〉表象 文学・文化運動・地方雑誌』東北大学出版会、二〇一八年、一三―三八頁。
- 7 山崎芳雄『弥栄村要覧』（満洲移住協会、一九三六年）によれば、最初の武装移民団の募集は、青森、岩手、秋田、山形、宮城、福島、新潟、長野、茨木、栃木、群馬の一一県の在郷軍人から選抜したという（四八頁）。一九三三年一〇月、佳木斯^{チャムス}に到着し、その後、永豊鎮（孟家崗）に入植した（五三頁）。
- 8 白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』北海道大学出版会、二〇〇八年。
- 9 島木健作「満洲の旅から還る」（『随筆と小品 河出書房、一九三九年八月、『全集』第二三巻、八七頁）に、「私は三月二十二日に東京を発つて渡満の途にのぼった。途中四国に渡り、香川県に四日間ほど滞在し、朝鮮では、仏国寺、慶州を経て、京城に一週間余りゐた」と記している。なお、戦後に刊行された『随筆と小品』（河出書房、

一九四七年一二月、三二版)には満洲関連のエッセイ「内原見学」「チオンバの花」(『婦人公論』一九三九年九月)「野の花と興安嶺」(『満洲グラフィ』一九三九年九月)「満洲の旅から還る」は収録されておらず、また初版発行月を一九三九年「四月」と記載しているが八月の誤りである。

10 島木健作「北満開拓地の課題」『満洲紀行』八頁

11 本稿では立ち入って論じないが、同時期に満洲を旅行した見聞記を含む伊藤整『満洲の朝』(育成社弘道閣一九四一年一〇月)、福田清人『大陸の青春』(小学館、一九四二年二月)にも現地の写真が巻頭に掲載されている。福田書掲載の写真の撮影者は定かではないが、伊藤書は著者撮影の写真である。

12 この時期の写真界の動向については、白山真理『〈報道写真〉と戦争 1930-1960』(吉川弘文館、二〇一四年)を参照。「第五章 アマチュア包囲網」では、一九四〇年の渡邊の発言に触れながら、雑誌統制への協力など時局に対して積極的に同調したことに触れて論じている。

13 『東京朝日新聞』一九三一年一二月一四―一六日。のちに『芸術界の基調と時潮』(六文館、一九三二年二月)所収。板垣は、堀野正雄の写真を組み合わせて構成した「大東京の性格」(『中央公論』一九三一年一〇月)を発表していた。

14 伊奈信男「新体制下に於ける写真家の任務」(『カメラアート』一九四〇年九月)、渡邊勉「国家宣伝と写真作家」(『カメラアート』一九四〇年一〇月)。

15 渡邊勉「満洲転戦半歳」『フォトタイムス』一九三九年一〇月。渡邊「転戦九ヶ月を顧みて(上)」(『フォトタイムス』一九四〇年二月)には、撮影旅行先に満洲を選んだ経緯を「新しい支那の建設を正しく批判し、認識する上にも、満洲国の機構と現実の動きを確り見ておくことが必要だ」と考えたためだったとし、「島木健作、

山田清三郎の両作家は、シンセリテイな態度と良心的な心構へをもつて開拓地を歴訪して居られ、両氏には僕の旅行の態度は充分理解してもらへたし、進んで共鳴と激励さへ受け」と記している。

渡邊『組み写真の写し方纏め方』、二〇頁

17 「発会式の準備」『昭和一四年版 土の文学作品年鑑』教材社、一九三九年二月。

18 島木健作「国策と農民文学」『東京朝日新聞』一九三八年一月一七—一九日、『全集』一四巻。

19 同号『アサヒグラフ』の表紙は、堀野が撮った中国人モデルの写真だった。戸田昌子「女性美」から大陸への道程」(東京都写真美術館編『幻のモダニスト 写真家堀野正雄の世界』国書刊行会、二〇一二年)によれば、堀野は「一九三九年五月から七月上旬にかけて北支、満州などへの撮影旅行」をした。このころの堀野は「働く女」をテーマとし、「日本の田舎を見るかのようなまなざしを、半島、大陸へと敷衍させていく」と指摘している。

20 堀野正雄『滿蒙開拓団の回想 その周辺50年前の軌跡』(堀野洋子記念親洋会事務局、一九九三年)に、堀野が満州で撮影した写真がまとめられている。鉄驪や哈爾濱の青少年義勇軍開拓団訓練所の団員や寮母たち、弥栄村、千振郷、第七次四家房、ハイラル(海拉爾)の白系露人村、蒙古の遊牧民などを撮影した写真がある。このうち弥栄村、千振郷を写したものに「開拓地の子ら」と同じ場所かと思われる写真がある。角度が違い、後の風景などからは判断できないが、木柵や子供の着物から推測される。そこには幼児の面倒をみる女性たちを写した写真とともに、「託児所も自然に生まれた」との説明がある。

21 『満洲紀行』、「序」三—四頁。

22 堀野撮影であることは、堀野前掲書『滿蒙開拓団の回想』四五頁に同じ写真があることで確認できる。

23 『満洲紀行』、一七九—一八〇頁。

- 24 『満洲紀行』、一七二頁。
- 25 『満洲紀行』、一八〇頁。
- 26 『満洲紀行』、一八〇―一八一頁。
- 27 『満洲紀行』、「序」一一二頁。
- 28 『満洲紀行』、二八九―二九〇頁。
- 29 『満洲紀行』、二九一―二九二頁。
- 30 『満洲紀行』、二九四頁。
- 31 ジイド『ソヴェト旅行記』（小松清訳、岩波文庫、一九三七年）を復刊した一九九二年版（第八刷）の一八〇頁―一行目から一八四頁六行目に相当する部分が削除。ダビの四行詩（ソネット）が引用された部分で、第一次世界大戦への従軍体験を踏まえた戦争と死をモチーフとしている。
- 32 海外での反響を邦訳で報じたものに、雑誌『セルパン』一九三七年三月号がある。ロマン・ローラン「ジイドのソヴェト観を批判す」、ミドルトン・マリ「ブルジョアの幻滅」、バンジャマン・クレミュウ「ジイドのソヴェト批判」、リオナード・ウルフ「ジイド批評の狂信性」、ジャック・ユイスマン「ジイドと旅行を共にして」を掲載。
- 33 前掲岩波文庫、一九九二年、一五一―一六頁
- 34 国分俊宏「本書をお読みになる前に―訳者によるまえがき」、ジッド『ソヴェト旅行記』国分俊宏訳、光文社古典新訳文庫、二〇一九年、一三頁。
- 35 小林秀雄「ジイド『ソヴェト旅行記』Ⅲ」『文学界』一九三七年六月。引用は『小林秀雄全集第五卷』新潮社、

二〇〇二年、一八四頁。

36 国分俊宏「解説」前掲『ソヴェエト旅行記』、三二二頁。

37 『満洲紀行』、三二〇―三二二頁。なお、「旅の手帳から」という表題と類似した表題「旅の手帳より」が『ソヴェエト紀行修正』にもある。こうした点にも『ソヴェエト旅行記』『ソヴェエト紀行修正』を意識していたことがうかがえる。

38 『ソヴェエト紀行修正』、一五六頁。

39 「新しい人間のタイプ」への関心については、『満洲紀行』の中で繰り返し言及していた。「北滿開拓地の課題」では、満洲に向ける関心について「つねに人間に対する興味が先立つ私は、何よりも先づ新しい土地に成長しつつある新しい人間のタイプを想像した」と述べていた。本論の中で言及したように「孫呉にて」冒頭にもある。「斉齊哈爾から訥河まで」では、訥河駅の助役U氏との出会いと近隣の村への協力の姿を「U氏のごときも亦たしかに満洲の地が生みつつある新しい人間の一つのタイプである」と記した。「満洲へ旅する人に」では、満洲では協和会と農事合作社を訪ねるべきことを勧めて、その理由を「ここにこそ彼等が逢ひたいと望んでゐるにちがひない青年がゐるから」だとし、「日本には見られぬ人間、満洲国ならでは見得ない人間のタイプがあるからである」と述べた。こうした「新しい人間のタイプ」を形象化したのが小説「青服の人」だったといえよう。

40 『満洲紀行』、六頁。

41 『満洲紀行』、三四四頁。

42 『満洲紀行』、三五九頁。

前掲島木「国策と農民文学」『全集』一四卷、一四二頁。